

没後70年 南薫造 (みなみくんぞう)

東京ステーションギャラリー(丸の内) 2021.02.20~04.11



「南薫造」(1883~1950)は広島・呉出身で、東京美術学校卒業後4年間ほど英国に留学し、日本では政府主催の美術展「官展」中心として活躍した洋画家で、郷里には1985年に建設の「南薫造記念館」に作品が展示されている。

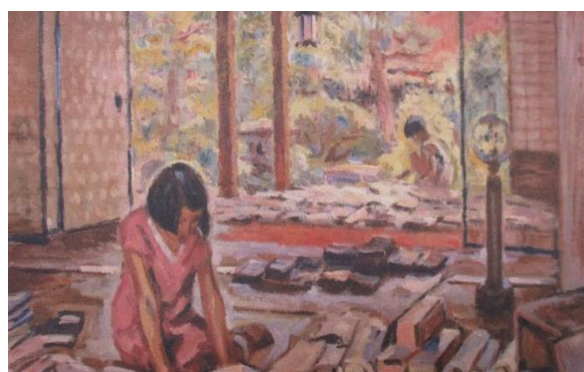
彼の作品の魅力は、**風景や人物の端正な描写にあり、卓越した油絵具の扱い、透明水彩画における繊細な色彩感覚、木版画に端的に見て取れる画面構成で仕上げられている**ため、まさに「日本の印象派作家」と称されている。

特筆すべきは、イギリスに留学し清新な水彩画に親しみ、「ターナー」をはじめ水彩画家を数多く輩出してきた同国で磨かれた画伯の水彩画は、異質の繊細な光の状態や微妙な色調の変化が巧にとらえられていることである。

本展は、文展、帝展、日展の出品作などの画伯の代表作を網羅するとともに、英国留学時代に描かれた水彩画や木版画の全貌を伝える回顧展である。



《フランス女性》 1908年 左
《曝書》 1946年 右



《うしろむき》 1909年 中

画伯の晩年は、出身地広島が生家で毎日静かに制作に打ち込む生活で、美しい瀬戸内海の景色に近所の閑静な風景や家族の姿などを、独自の伸びやかなタッチで描いている作品が多くて、本作品はその代表作のひとつとされている。